

平成25年 2月 定例会

◆（淵上陽一君）次に、不登校問題についてお尋ねいたします。

ただいま2030年問題について質問いたしました。2030年問題という言葉が社会の注目を集めたもう一つのきっかけは、実はひきこもり問題を通じてのことでありました。

ひきこもり問題の第一人者である精神科医の斎藤環氏は、6年前に出版した「ひきこもりから見た未来」という著書の中で、ひきこもりの2030年問題として、ひきこもりの高齢化による老齢年金受給年齢への到達と親の死との直面を指摘し、そのとき彼ら自身に、そして社会全体に何が起きるのか予測しています。

ちなみに、昨年の内閣府統計によれば、15歳から39歳までのひきこもりの推定総数約70万人のうち、30代が46%、年齢が上がってきている上に、実は、ひきこもりが最も多い年代は、この統計に含まれない40代と推定されていることから、その2030年問題はさらに深刻さを増すとの危惧が強まっているのであります。

こうした状況の中で、現に引きこもっている人への支援とともに、ひきこもりの未然防止に向けた調査と対策がさまざまに実施されておりますが、その中で私が最も注目しておりますのは、ひきこもりと不登校の関係であります。これに関しては、これまでさまざまな調査が行われ、対象の条件や時期等によってばらつきはありますが、ひきこもりのうち不登校の経験を持つ割合が、少ないものでも6割、多いものでは9割に上っているという報告が出されています。

本県においても、ひきこもりと不登校に関しては、教育委員会や子ども・障がい福祉局を初めとして、行政、民間双方のさまざまな機関、団体を通じて支援が実施されていると理解しております。

しかし、不登校に目を向けますと、県全体の小中高における不登校児童生徒数は、21年度で2,401人であったものが、22年度では2,355人と46人、1.9%の減少にとどまっているという現状に、一体なぜだろうかと、素朴な疑問を感じるわけであります。

そこでお尋ねですが、これだけの取り組みが続けられている中で、なぜ不登校生徒の数がもっと減らないのか、また、どうすれば一層の改善に結びつけることができるのだろうか、教育長に現状の認識とこれからの取り組みについてお尋ねいたします。

〔教育長田崎龍一君登壇〕

◎教育長（田崎龍一君）まず、不登校問題の現状認識についてですが、不登校の要因、背景は、不安や無気力などの本人の問題や家庭生活、学校生活に起因する問題などさまざまです。要因や背景が複雑に絡み合い、早急な解消が難しいものも多いと感じております。

これまで、県教育委員会では、不登校の未然防止と早期解消に向けて、さまざまな取り組みを行ってきました。小中学校に対しては、愛の1・2・3運動として、1日欠席で電話連絡、2日欠席で家庭訪問、3日目以降の欠席にはチームで対応することや、教職員が情報を共有できるよう、個別の指導記録簿を作成することを指導しております。また、高等学校においても、入学後の集団宿泊訓練や家庭訪問を計画的に実施し、初期指導の充実を図り、生徒に対し、全職員で対

応、支援する体制づくりに努めるよう指導しております。さらに、教育相談体制の充実や家庭環境の改善のために、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーなどを活用した取り組みを進めております。

このような取り組みの結果、不登校児童生徒数は減少傾向で推移しておりますが、まだ多くの児童生徒が登校できない状況にあることを、将来の社会的自立の視点から、大きな課題として受けとめております。

次に、これからの取り組みについては、これまでの取り組みに加えまして、不登校の未然防止等に効果のあった学校の取り組みを、管理職を初め生徒指導担当者等の会議を通して、県下の全ての学校への普及を図ってまいります。また、解消が困難なものに対しては、学校や家庭で抱え込むことなく、専門家や関係機関との連携を密にして解消を図るよう指導してまいります。

このような取り組みを通して、児童生徒一人一人が、将来の夢や希望の実現に向け着実に進んでいくことができるように支援してまいります。

〔淵上陽一君登壇〕

◆（淵上陽一君） ことしの高校の卒業式に際して、私は、祝辞の中で、遠からず訪れる超高齢少子化社会において、あなた方若者は、今以上にその存在自体が社会全体の大切な宝であり、新たな社会をしっかりと動かし、導いていく強力なエンジンに成長することを期待しているという言葉を送りました。

ただいま教育長の答弁の中で、不登校の要因、背景は多様であり、早急な解消が難しいものも多いと感じているとの発言がありました。確かに、文科省が実施している児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査結果を見ましても、不登校となったきっかけと考えられる状況が、学校、家庭、本人で 17 項目も上げられており、解決の難しさは理解できます。

一方で、社会全体の宝である子供たちが、不登校によって希望を失い、輝きをなくすことがあってはならないと心から願っております。

加えて、不登校を経験した子供たちの多くがひきこもりになると言われている今、不登校は、本人、家庭、学校の問題にとどまらず、社会全体に大きな影響を及ぼす問題でもあります。

不登校の解決に向けて、教育担当者だけでなく、関係する全ての機関が連携、協力を深め、学校内外のさまざまな人的資源を十二分に活用し、より一層きめ細かな対応をおとりいただきますようよろしくお願いいたします。